

## 令和6年度 学校総合評価

### 6 今年度の重点目標に対する総合評価

本校は、スクール・ポリシーに基づき、生徒が主体的に学習を進め、自らの進路を切り拓く力を育むとともに、学校行事や部活動を通して豊かな人間性を育むことを目標としており、今年度はこれを5分野11項目の具体的な重点目標に反映し、さまざまな教育活動を行ってきた。また、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定Ⅲ期目の初年度となる今年度は、今期の研究開発課題に基づく取り組みを開始し、着実な成果を挙げた一年となった。

学力向上においては、互見授業を通して教科横断型授業やICTの活用、アクティブラーニングの活用など指導の工夫を共有し、授業改善を推進した。授業改善は生徒の学習意欲の向上、ひいては学力の向上につながるものと考えられる。また、テストの見直しなど、学習のPDCAサイクルを意識させる取り組みもここ数年で定着してきた。

進路指導においては、進路講演会、大学探訪、アメリカ研修など、充実した行事を継続して実施した。これらの行事は、生徒の進路意識の高揚に大きく貢献し、引き続き高い満足度を得ることができた。

ホームルーム活動では、生徒の自主性を尊重した討論や読書会などの活動が高く評価された。部活動については、メリハリのある活動を意識させることで学業との両立を実現し、充実感を味わわせることができた。

図書館の活用においては、今年度、レファレンスサービスに力を入れ、県立図書館との連携強化や蔵書検索システム「カーリル」の導入など、必要な図書を入手しやすい環境を整備した。これは読書意欲の向上につながるるとともに、探究活動における書籍の利用を促進することにも寄与した。

探究活動においては、2年普通科の課題研究において、企業等との連携をさらに増やしたり、文理融合の班活動を取り入れたり、新たな試みを展開した。企業から専門的な知見に基づいたアドバイスをいただくことで、生徒の探究活動はより深化し、また、STEAM教育のA（アート）の視点を活動に取り入れることで、探究活動に新しい切り口を設けることができたと考えられる。さらに、こうした活動を進めるノウハウは「探究マニュアル」としてまとめ、次年度以降の担当者の負担軽減を図ることとした。

教科横断型授業は、生徒の知的好奇心を刺激し、柔軟な思考力を育成する上で効果的であると考えられる。データサイエンスの授業は、現1年生から年次進行で導入することとし、1年次の授業計画とワークシートを作成した。これらは、教材や指導案などを蓄積し、次年度以降も利用できるように整理している。

全体として、進路指導や特別活動などでは伝統的で本校の柱となってきた活動を継続しながら、日々の授業や探究活動においては先進的な教育活動の推進に取り組んだ1年であった。

### 7 次年度へ向けての課題と方策

今年度は新課程の生徒が初めて卒業を迎えた。スクール・ポリシーで謳う資質や能力が備わったか、進路状況もふまえて検証し、教育課程の見直しを行う必要がある。また、次年度は各学年6クラス体制が完成することに合わせ、授業展開、成績処理、進路指導などのシステムについても適切な形を確立したい。普通科においては今年度多くの企業や機関と連携し、探究活動を進めた。次年度についてもこれを継続するとともに、文理や学科（普通科、探究科学）の壁を超えて互いに刺激し合い、高め合うような「融合」のシステムを構築することが課題である。教科横断型授業、データサイエンスの授業についても継続的に教材開発を行い、互見授業でその共有を図りたい。

生徒の学力向上を目指すことはもちろん、学校行事や部活動の充実を継続して図り、健全な心身・優れた知性・豊かな情操を培い、民主的で自主性・創造性に満ちた人間の育成に努め、生徒・保護者・地域・社会の期待に応えるとともに、「新しい社会を共創し、未来の世界と日本をリードしていく生徒を育成する」ために、「計画・実行・検証」の学校評価システムを確立し、充実した教育活動を展開していきたい。